

# 成川群集墓の全体像

繁 昌 正 幸

The Total Image of Narikawa Cluster of Tombs

Hanjo Masayuki

## 要旨

成川遺跡は、1957（昭和32）年の発見以来、3回の考古学的調査が実施されてきた。今回、これまでの調査区を図上で整理し、遺跡の主体をなす群集墓（古墳時代）の全体像を復元した。そして墓域の広がりや埋葬者の問題等の検討を行った。また、そうすることで明らかになったいくつかの課題も提示した。

**キーワード** 群集墓、全体遺構図、形成過程、副葬と供献

## 1 はじめに

1957（昭和32）年の砂採取によって発見された鹿児島県指宿郡山川町の成川遺跡は、一部で縄文時代や弥生時代の遺構・遺物がみられるものの、主に古墳時代の群集墓として、あるいは成川式土器の標式遺跡として知られてきた。

これまで数回の発掘調査が実施され、それぞれの概要が報告されている<sup>1)</sup>が、個々の調査について記載されているのみで、一つの遺跡としてまとまった内容とはなっていない。そのことから、群集墓の全体像を把握することが困難な状況となっている。今回、成川遺跡の発掘調査担当者のひとり<sup>2)</sup>として、発刊されている資料をもとに、「成川群集墓」<sup>3)</sup>の全体像を把握する試みに挑戦してみたい。

## 2 発見の経緯と調査の歴史

成川遺跡は薩摩半島の南東端、鹿児島県指宿郡山川町成川字曲道に所在する。1957（昭和32）年の山川湾の埋め立て工事に伴って砂採取を行った際、砂の中から人骨が発見された。

人骨の発見は、当時、指宿高等学校に勤務していた河野治雄氏の知るところとなった。氏は直ちに現場に急行し、人骨の出土している状況の把握と、弥生時代の墓地であることの確認を行った<sup>4)</sup>。さらに、その情報は河口貞徳氏（当時、玉龍高等学校勤務）にもたらされ、その年の内に短期間の調査が行われた（河野他1958）。

翌1958（昭和33）年には斎藤忠氏を責任者とする調査団が結成され、文化財保護委員会（現文化庁）の手で組織的な発掘調査が行われた（文化庁1973）。

1980（昭和55）年から翌年にかけて、国道226号成川バイパスの建設に伴い、再び調査が行われた（鹿児島県

教委1983）。

なお本稿では、これまで行われた3回の考古学的調査について、以下のような名称（第1～3次調査）を用いることとしたい。

- ・1957（昭和32）年の調査～第1次調査
- ・1958（昭和33）年の調査～第2次調査
- ・1980, 1981（昭和55, 56）年の調査～第3次調査

これは、あくまでも検討作業を進めていく上での便宜的な名称である。

## 3 検討の方法及び手順

群集墓の全体像を把握するため、まず第3次調査の土坑墓の図に、残存していた人骨の図を書き加えた。次に第3次調査時の地形図に第2次調査の調査地区を当てはめ、人骨や立石などの出土状況をそのまま書き込んだ。また、日記や表により人骨の出土位置が記載されているもので、図にないものは2mのグリッド中にドットとして落とした。

第1次調査の実施区については、報告書掲載の図を拡大して揃え、明確な検出位置としてのドットを落とした。調査以前の砂採取時の区域については、砂採取に伴って出土した人骨の数は42体であったとの記録から、その区域に均等に埋葬されていたと仮定として概略位置をドットで落とした。

次に、周辺地形の表現に取りかかった。第3次調査時の周辺地形図をもとに、第1, 2次調査時の地形図と遺跡の南側を通る道を基準として重ねて全体図とした。ただし、調査の行われた区域については遺構の検出位置が重要と考え、調査区域内だけで使用していたコンターを

そのまま使用した。このため、ラインが繋がらないという欠点が生じたが、各調査区における傾斜の方向と遺構の在り方を検討する上で有意義な作業と考えた。ただ、それぞれのコンターも数値の単位が異なっていたり、各報告書中の数字が読めなかったり、間隔が空きすぎているために正しい数値であるのかといった疑問が最後まで払拭されなかったことも事実である。

このようにして全体図は一応完成を見たわけであるが、広域に表示すると遺構そのものが小さくなってしまったため、群集墓を中心に最小限の周辺地形を入れて仕上げたものが第1図である。

#### 4 全体図から探る課題

これで当初の目的はとりあえず達成されたが、次にこの全体図から以下にあげる4つの課題が浮かび上がってきた。

- ・群集墓の広がりはいくらほどか。
- ・埋葬された人数はいくらだけか。
- ・その人たちはどの範囲の地域に住んでいたか。
- ・群集墓はどのように形成されていったか。

##### (1) 群集墓の広がり

全体の平面図は一応完成した。そこで、今度は断面図の作成に着手した。しかし、各調査時期での接点が見つかからない。断面が同一ラインに並ばないことから、第3次調査の断面に揃えるため、第2次の調査区を斜めに置き、同一ラインに近い形としての断面図を作り上げた。これが第2図である。正確さという点では若干弱いが、先ほども述べたように、平面図や地形図においてすら正確さが期待できない以上、次善の策としてのこの方法も仕方がないと考える。

第3次の調査(北地区)で検出した土坑の北には遺構は広がらず、第2次の調査(東地区)で検出された板石群の位置が南側に急傾斜で落ちている部分に投げ込まれたものである可能性を考慮することで、群集墓の北と南の端が確定した。

南の端については、第3次調査で行なった道路部分の調査で、1957(昭和32)年の砂採取で残った伸展葬人骨(60号)の南側の急傾斜部分に、廃棄された立石と考えられる長さ1.4m程の安山岩製の柱状石が投げ込まれていたことも上記の考えを補足する。

東と西の境については、土坑及び人骨の出土が途切れる辺りを境界と考えた。このように東西南北の境が判明したことを受け、群集墓としての総面積を計算した結果、約2,000㎡ということになった。

##### (2) 埋葬者の数

次に、その範囲内にどれだけの埋葬が行われたかを算出することにした。そのために、畑の耕作や道の工事などにより破壊されたり、調査や工事から免れていると考

えられる部分の人骨数を推定するための図を作成することにした。これは、全ての人骨または土坑の位置を表したものに1mメッシュの線を引き、1m間隔で埋葬遺体数を算定し、削平部分及び未掘部分は全体的な埋葬の実数を基に推定を行い、埋葬者の総数を算出するという作業であった。それによると、474体の埋葬が考えられるという結果が弾き出されたのである。これが第3図である。

もちろんこの数字は、想定される概算に過ぎず、参考数値であることは言うまでもない。

##### (3) 埋葬者の居住範囲

それでは、成川群集墓に葬られた人々はどこに住んでいた人たちなのだろうか。それを示唆するものとして、人類学者である金関丈夫氏による出土人骨及び成川集落居住者の計測結果(金関1973)と松下孝幸氏等による人骨の計測結果(松下他1983)を検討材料とした。

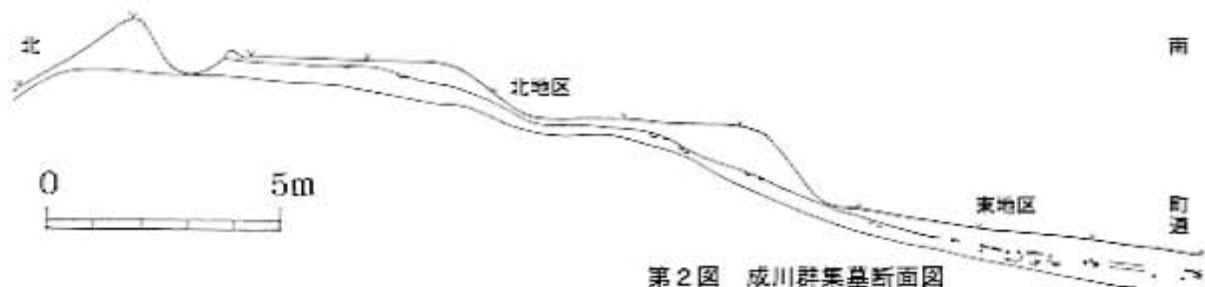
前者の結果は、現在の成川集落居住者の計測結果とほとんど変わらず、また、後者の結果からも当該地域及び大隅半島と種子島を含む南九州地域から発見された人骨のそれと変わらないことが指摘されている。この双方の計測結果が意味するものは、これらの埋葬者はとりもなおさず当該地域を含む南九州の人々であって、南九州以外の地域から来た人々が葬られているわけではないということになる。

それなら、どの地域の人々が葬られたかを考えるに、群集墓の継続期間と埋葬者数が参考になるのではないか。出土遺物によって、弥生時代中期後半または後期から6世紀前半位までとすると、約300年間に450体ほどの埋葬は1年間に1.7人平均ということになる。10年間では17人ほどが埋葬される計算になり、1地域の死者数とほぼ同じと考えられるのである。つまり、本群集墓はこの成川の盆地内の人々、若干範囲を広げたにしても、隣接する大字程度の人々の集団墓地であると考えられるのである。それは、第4図の周辺遺跡地図を見てみても、古墳時代を中心とする遺跡は現在の指宿市橋牟礼川遺跡周辺で多くみられるものの、この成川の地域ではそれほど多くはないのである。したがって、ここに埋葬されたのは、成川盆地内とその盆地を見下ろす南側及び西側の地域に住んでいた人々だった可能性が考えられるのである。

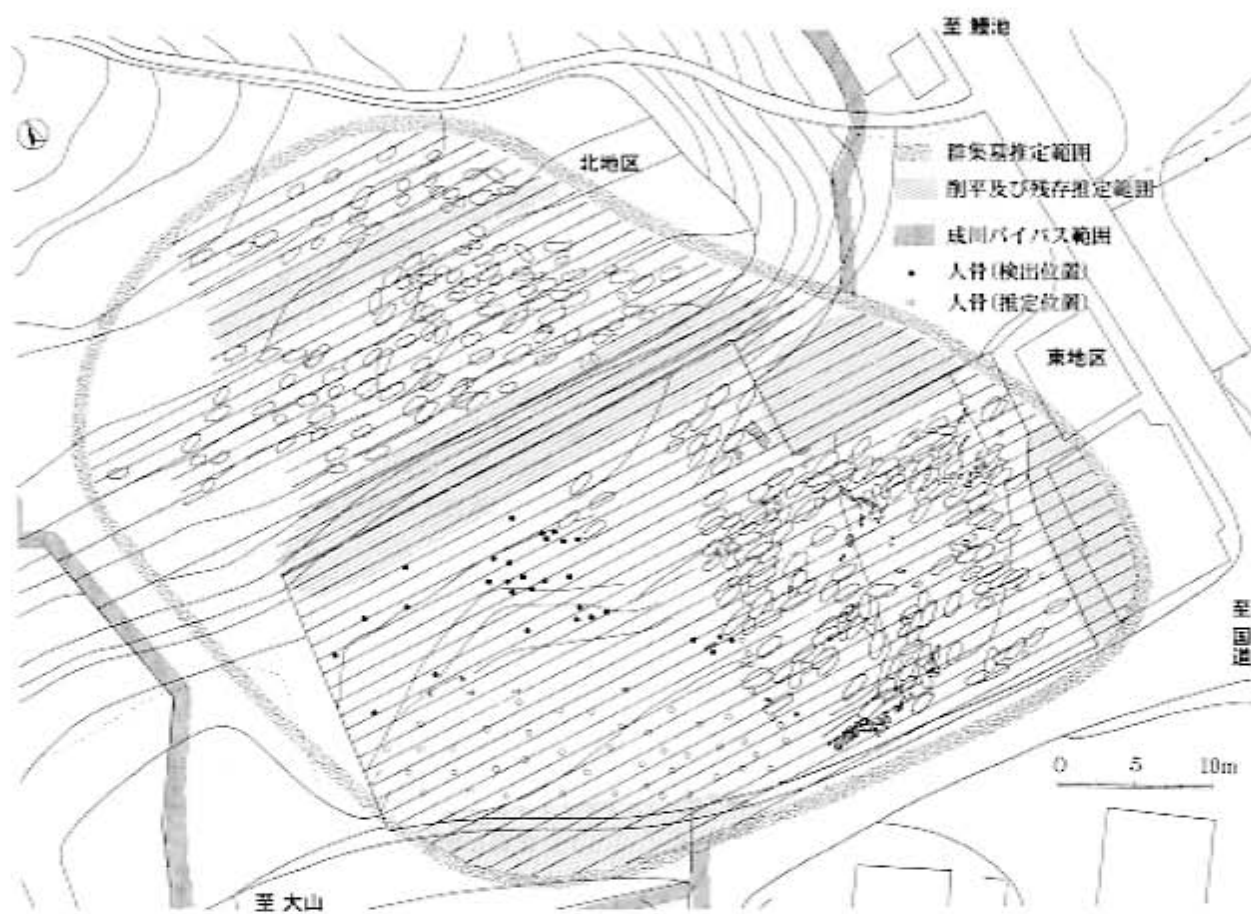
もちろん、これはあくまでも計算上のことであって、300年間も持続するムラが当時あったかどうか、また、450体もの集団墓が全国的に存在するかどうかについては、考慮すべき点が多々あることは認めざるを得ない。ただ、遺跡での遺構や遺物などの在り方からすると、相当な期間に亘って墓が営まれていることは否定できない。天変地異や戦亂などによって短期間のうちに多数が死んで葬られたことが全く無かったとは言えないが、それで



第1図 成川群集墓全体図



第2図 成川群集墓断面図



第3図 埋葬者数算定概念図



第4図 成川遺跡周辺図

も先述したように、遺構の切り合いがほとんど見られないことから導き出せる結論として、長期間に亘って生活が営まれた結果であると考えられるのである。

#### (4) 群集墓の形成順序

次に検討したのは、この集団墓地はどのような順序で形成されたのか、ということであった。それを解明することが容易でないことはすぐにわかることである。というのは、それぞれの遺構（土坑や立石、焼き火跡など）や遺物（人骨）に伴った土器や鉄器などの出土位置が全くといって良いほどわからないのである。土坑の切り合いも少ないばかりか、それ以前に、第1、2次調査では数基の土坑しか確認されていないのである。

そこで、各調査時期の遺構・遺物等の出土状況図を基に、出土位置が判明している遺物をピックアップし、その位置から枠外に線で引き出し、その遺物の実測図を提示しようと考えた。ただし、これまで何回も繰り返し述べてきたように、出土位置がピンポイントで表示できるものはほとんどないのである。したがって、次善の策としてグリッドで表示せざるを得ないものが大部分であった。

第1次の調査地区については、人骨番号が明確であり、それに付随して出土した遺物を提示した。ただ、出土位置の明確なものは10点ほどで、それ以外はすべて一括とせざるを得なかった。そのようにして完成したのが第7図である。

第2次調査の東地区については、土器の出土位置は全く記載されておらず、不明であった。鉄器及び鉄製品については一覧表にまとめてあったため、全容がほぼ理解できた。ただ、それも2mグリッドの範囲内という制約付きではあるが、一覧表からその全てをグリッド内に書き入れるとともに、日誌により補足して記入していった。その後、種類毎に数量をまとめ、グリッド毎の位置図として作り上げた。周囲に鉄器以外の出土品で、形の整ったものを中心に並べた。鉄器については一か所にまとめた。そうして完成したのが第5図である。

第3次調査の北地区については、報告書の出土位置図では完形品や鉄器は記号を変えてドットとして落としてはあるものの、どの遺物の出土位置なのかは全くわからなかった。そのため、鹿児島県立埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管してある現場での実測図や、整理作業時に作成した遺物の実測図を閲覧し、現場のドット図の番号と実測図に記入してある遺物番号を確認する作業を行った。時期の確認に有効と考えられる遺物（土器）については再度トレースを行った後、そのドット図の周囲に並べた。そうして完成したのが第6図である。

第1、2次調査の報告書によると、群集墓形成の最初の時期が弥生時代中期あるいは後期の妻棺で、最も近く安定した広い場所のほぼ中央部に葬られたようである。

その後、弥生時代後期から終末期、そして古墳時代の初めの頃までに立石墓が30基ほど作られている。その場所は、前述した場所とほとんど変わらないものの、そのほぼ中央部を東西に帯状に広がるように作られていったと考えられる。ただ、東側では南北方向にも作られたようである。

鉄器から時期を考えることは難しいが、土器の出土位置が皆目わからない以上、冒険ではあるが鉄器によって考えざるを得ない。ただ、それでも鉄器の編年が確立しているとは言えない状況であるため、第2次調査の報告書の記載に基づいて考えてみることにする。そうすると、第1次及び第2次の調査区では、各時期の鉄器が地区別にまとまることなく散在した状態で出土している。これはつまり、同一の時期について広い範囲で埋葬が行われていたことを意味する。第3次調査では、弥生時代に遡る土器は北地区からは出土しておらず、古墳時代以降に埋葬が行われたことがわかる。

これらのことから成川群集墓は、当初は南側の低く広い場所で営まれたものであるが、そこが手狭になるとともに北側の高い尾根に移動したものと考えられるのである。ただ、鉄器で同様なタイプのものが北側でも南側でも出土していることから、古墳時代以降ある時期までは北にも南にも同様に葬られた可能性は否定できない。あとは、当該鉄器の詳細な時期区分、編年に待つ以外にはない。

## 5 その他についての考察

以上の他にも、完成した図やそれらを作成する段階で考えたことがあるのでそれらについて述べてみたい。

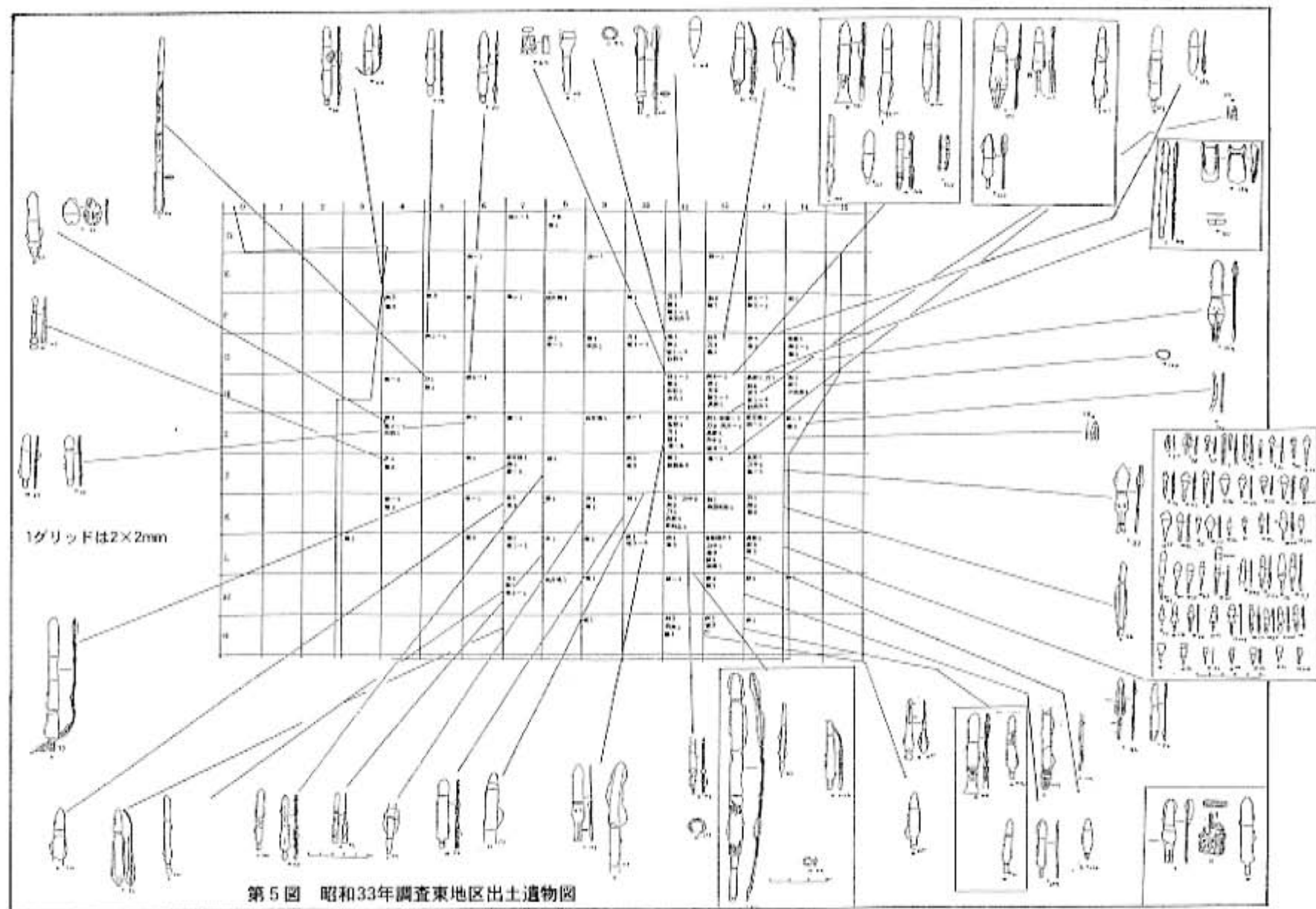
### (1) 立石と焼き火跡

立石は、報告書でも述べているように、標柱としての依り代と考えられる(国分 1973)。その立石を目印にして、いくつかの群が形成される。これは、多分に民族的な性格を持つものであるかも知れない。つまり、一つの立石は、ある特定の氏族に属する標識的な遺構として捉えることができるかも知れない、ということである。(第8図参照)

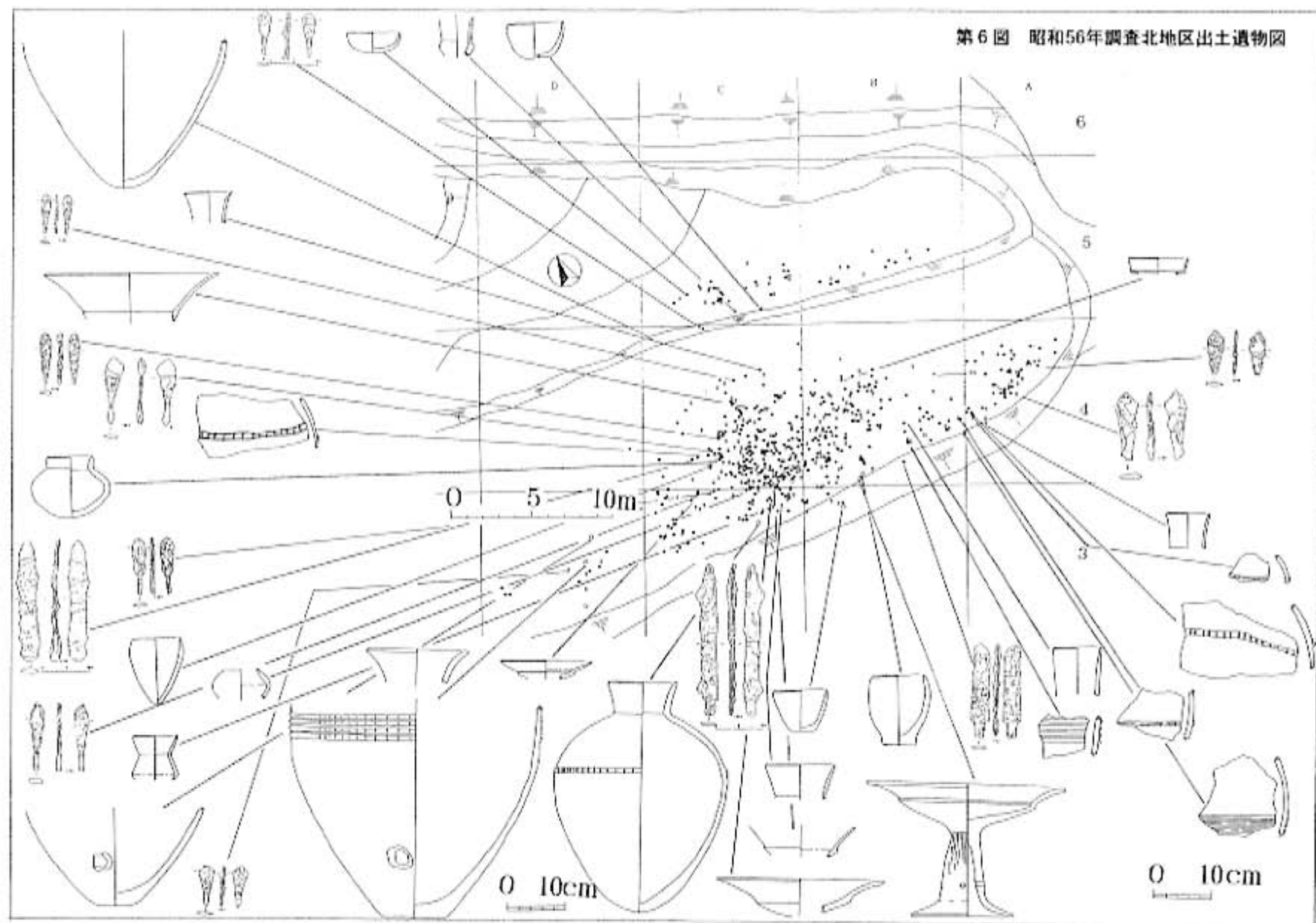
それに対して、焼き火跡は、その当時の墓地全体の中心に位置する神聖な場として捉えられることが可能と考えられる。それは、この2か所の焼き火跡のうち、南側の小さく分かれたものを中心として北東の人骨の辺りを一方の端として円を描くと、第2次調査の範囲は、ほぼその円内に収まるからである。言い換えれば、この南側の焼き火跡を中心に、その時期の墓地が営まれていたと考えられる、ということなのである。(第9図参照)

### (2) 墓標の有無

第2次調査の報告書の記録や、実際に筆者が第3次調査に参加した印象からも、遺物は上下からそれこそゴチャ



第6图 昭和56年調査北地区出土遺物図



ヤゴチャといった表現がふさわしいほどに出土することは事実である。ただ、遺構（土坑）そのものが相当な頻度で重複しているわけではなく、土坑の夥しい擾乱は見られない。土坑がほとんど確認されなかった第2次調査にしても、新たな土坑を掘るに際して、仮に前の人骨が出てきたにしても、その部位がわからなくなるまで破壊している状況は見られないのではないか。それ以上に、第3次調査で土坑の重複が極めて少ないことから、墓標の存在が推定しうるのである。

基本的には、遺構（土坑）自体に上下の重なりはないのであって、マウンドを含む墓標の存在を前提としなければ、このような状況・結果とはならないと考えられる。一部の重複は、その墓標が存在意義を失った時、すなわち、時間の経過によって木製なりの墓標が朽ち果てた時、または、マウンドが崩れ去った時などに起きたことではないだろうか。

もちろん、それらの墓標が300年間もまるまる残っていたとは考えられず、短期間のうちに痕跡を留めない程になってはいただろうが、それぞれの墓域で考えたとき、それでもそこは墓が築かれた場所であった、という記憶だけは短期間であっても残っていた可能性はあるのではなかろうか。だからこそ、重複は極めて少ないのである。

### （3）遺物は供献か副葬か

出土した遺物は、成川式土器や土師器・須恵器などの土器類と鉄器・鉄製品が主である。それらの遺物は、先に述べたように遺構の上下から混然とした状態で発見された。これは、土坑の内部に置かれた副葬品と、埋葬遺体を埋めた土の上（あるいは埋土中）に置かれた供献品の両方があったことを意味していると考えられる。

それは、これだけ狭い範囲に葬られた埋葬遺体の多さにもかかわらず、土坑の重複がそれほど多くないことから、埋葬遺体の覆土はある程度動いている可能性があり、覆土上あるいはその中にあった遺物が大きく上下に動いた結果と考えるのが自然だと考えられるからである。

第3次調査においても、南側への傾斜面の中央部では相当量の土器類が上下で出土した。しかし、その割に、土坑中の鉄器類はほぼ原位置を留めているように感じられた。つまり、長い年月によって墓標が失われた墓は、後世の人が新たな墓を掘る際に、それと認識せずに旧来の墓の覆土を動かしたのだが、人骨を検出する深さに至るまでの間にその作業を終えたか、遅くとも人骨の一部を検出した段階で作業を止めたかして、前の墓主まで除去することはなかったのであろう。何しろ、その時点で名前まではわかっていなくとも、「我々のご先祖様」ということは認識していたであろうから。

ただ、地形からして、そのように深い穴を掘ったことは考えにくいことから墓標の存在などが想定され、副葬

品を破壊してまで新たな墓を築くことはなかったと見るべきである。したがって、覆土上あるいはその中の遺物（供献品）は大いに動かされる運命となったのに対して、埋葬遺体の傍らに置かれた遺物（副葬品）はそのままの位置で残ったと考えられるのである。

### （4）異形鉄器

第2次調査出土の鉄器の中には、大きく曲がっているものが極めて多い。その鉄器のほとんどが、剣や刀、鉄鏃などの武器であることから、当時の情勢が戦闘状態であったと考える人は多い。それによる使用のために大きく曲がってしまったという解釈である（池畑1984, 1985）。

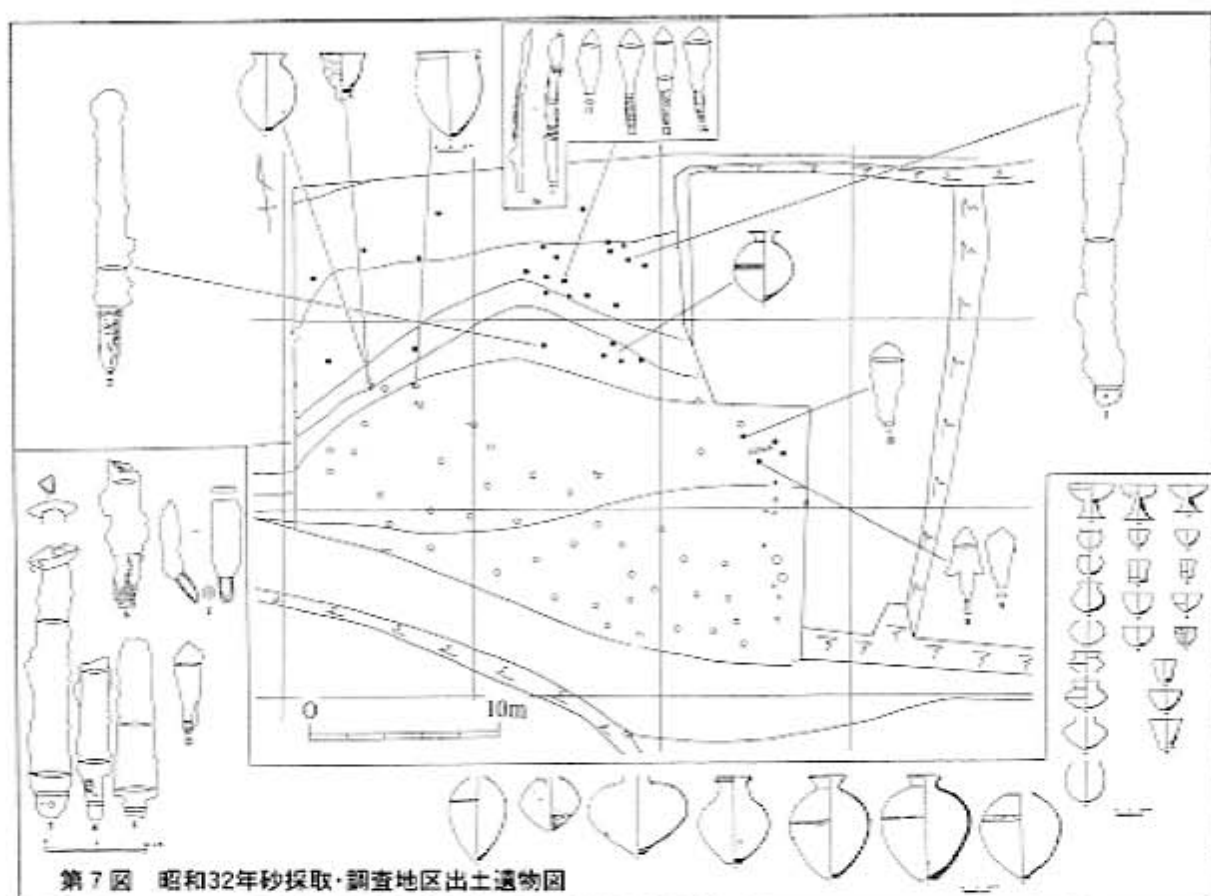
そうであるか否かは別にして、多くが曲がっていることは、その鉄が“なまくら”だったことを意味していると考えられる。つまり、鉄は製品を造る方法として鍛造と鍛造があるわけであるが、鍛造であればそれなりに堅くはなるが折れやすいという欠点を持つ。本遺跡からは折損したものも出土しているが、これは墓の覆土上か覆土中にあったことに起因し、後世の擾乱に依るものと考えられる。それは、黄泉の国に嫁立つ肉親や親戚、近親の者に、あえて折れて刃のない武器をもたせてやるかどうかを考えてみればすぐにわかることである。したがって、この鉄は鍛造ではなく鍛造によって造られたものと推量されるのである。

鍛造の利点は、敲打によっていかような形にも整形できるということである。ただ、欠点は柔らかくて曲がりやすいということである。この欠点をカバーする方法は、“焼き”を入れることである。形を整え、最後に“焼き”を入れて堅さを得るのである。ただし、この方法では、折れやすくなるという欠点が幾分発生すると考えられるが、

本遺跡出土の鉄器類のほとんどが曲がっていることは、この“焼き”を入れる技術を用いていないことを示していると考えられる。それについての知識がなかったのかも知れないが、いずれにせよ“なまくら”なものだった。したがって、曲がりやすかった。

それでは、そのような曲がったままの武器を死者に持たせたのか、という疑問が出てくる。結論から言えば、そうした、曲がったままのものを黄泉の国まで持たせてやったと考えている。その理由は、折損したわけではないから刃は残っているからである。もし、これが戦闘で使われたもので、その人のものであったとしたら、曲がっていても持たせたのではないか。手柄を立てたのであればその記念として、また、逆にそれによって命を失ったのであれば恨みの品として、一緒に葬ったと考える。もし、戦闘と関係がない場合には、手に入りにくい貴重な品として、個人に供えられたのではないか。

語を戻そう。それらの鉄器は“なまくら”であったが故に、実用としては甚だ心許ないものである。その欠点



をカバーする方法として考えられたのが、その鉄器の刃の部分を“挟ん”で固定し、がっしりとした強度を与えることであったと考えられる。その必要を満たすものとして造り出された物こそ、いわゆる“異形鉄器”だったのである。刃先を長く（または大きく）し、その長さ（大きさ）を確保するだけの基部を設け、木または竹などで挟むことによって曲がりやすさをカバーし、同時に強度を確保し得たのである<sup>91</sup>。

#### （5）開闢岳を神聖視して埋葬

開闢岳は、成川から西の方向に見える。群集墓が形成された時期は、平安時代（貞観・仁和年間）の噴火以前であるため、成層火山であったと考えられ、現在のように山頂が一點高い形ではなかったと推定される（成尾1984）。

第2次調査の報告書などには、開闢岳を神聖な山としてそれが見えるところに葬ったとの考えが書かれている。確かに第3次調査の北地区の比較的高い尾根の部分からは開闢岳がよく望めたし、南側の低平地からでも盆地の稜線の上に秀麗な山容を見ることができた。そうすると、開闢岳の望めるその地を墓所として定めたのは間違いないことになる。そう考えるとき、単に集落の外れの南向きの地を墓所と定めて埋葬を行ったというだけでなく、近隣の地域を含めてそこが最も相応しい場所と考えたと思えないのである。成川集落の低い部分からは西を望んでも開闢岳は見えず、西の外れの祖先を祀った集団墓地のそばまで行った時によりよく見えるということから、開闢岳を意識しその地を墓にしたと考えられる。

ところで、開闢岳の方に頭を向けて葬られたとの解釈については成立しにくいと考えている。それは地形的なことに起因しており、尾根の方向がほぼ東西の向きであったからに過ぎなかったからである。つまり、尾根という地形に相応しい効率的な墓穴の掘り方は、その方向に沿うことだったということである。墓は、南側の低平地から築かれ始めたが、その際、地形が緩やかに南に傾斜していたことから東西方向を埋葬の主軸と考えて掘られた。次第に上がっていくのであれば、なおさら東西方向でなければ穴は掘れなかったのである。その結果として東西方向の主軸が多くなったのである。

## 6 今後の問題点など

今回、成川群集墓の全容を捉えようとして取り組んできたが、問題点として残ったことや得た教訓を挙げてみたい。

### （1）土坑（人骨）と副葬・供献品のセット関係

どの人骨と遺物がセットになるかということとは極めて重要である。しかし、出土位置が特定できない上に、夥しい土坑の掘削によって副葬品以外は原位置を留めていないことが想定されることから、セット関係を掴むこと

は極めて困難ではある。しかし、今後ともその努力は続けていくべきである。そうすることで、現在漠然と“階級の未分化社会”としている当時の社会像が浮かび上がり、階級の有無、土坑の規模や形態、副葬品の有無等の葬制の差異、男女差、年齢差など様々な情報が得られるものと考えられる。

### （2）土坑の前後関係からの形成過程

群集墓の形成過程を解明するために、土坑の切り合い関係から前後関係を明らかにする作業がある。土坑の切り合いで形成順序を、また、遺物（特に副葬品及び攪乱を受けていない供献品）によって時期決定を行うことができれば、本群集墓の形成過程と遺集の経緯が判明するであろう。

### （3）未調査部分の調査

畑の耕作等で確実に削られて残っていない場所や道路の工事等で削られた可能性の高い場所以外で、遺跡が残存している部分がある。そこを調査することで、立石墓の形成に関する何らかの事実が確認される可能性も考えられる。たとえ、狭い場所であっても、調査によって成果の上がるのが考えられる。

### （4）報告書に記載すべき内容について

今回取り組んで痛切に感じたことは、報告書に記載すべき内容の問題である。言い換えれば、調査成果をどこまで記録すべきかということになる。後世の研究に耐え得る情報を記録すべきであることは言うまでもない。しかし闇雲に全てを記録するというわけにはいかない。何が必要とされる情報であるのか、常に精選する作業も行っていく必要がある。

発行年が古いほど現在の報告書と比較して記述的に不足しているものが多いことはある意味仕方ないことではあるが、新しいからと言って全てが網羅されているというものでもない。逆に、古いものであっても、表や目録等に書かれているものもあって大いに役立つものもあるのである。今回、人骨の位置はどうか判明したものの、遺物、特に土器についてはその出土位置は全くと言ってよいほど記載されておらず、手の施しようがなかった。遺物、特に土器の時期によって群集墓という長期間にわたる形成の順序を解明しようとした所期の目的は、このため未消化に終わってしまったと言わざるを得ない。残念の極みである。

## 7 おわりに

今回、成川遺跡の調査を担当した者の一人として全体像の把握に取り組んだものの、満足のいく結果は得られなかった。ただ、昭和32年の発見以来、それぞれが単独であったものを1枚の図としてまとめた作業は、群集墓としての成川遺跡の全体を概観するという意味で、自分としては幾分意義があるのではないかと考えている。

また、調査の結果を踏まえた群集墓の範囲や推定埋葬者数、そこに葬られた人たちの居住地の想定、「異形鉄器」とされた武器の使用法、土坑の主軸の問題から集居品を神聖視していたかどうかなどについて検討してみた。それでも多くの事柄が課題として残ってしまったが、その理由の一つに報告書への記載が問題であることを述べた。今後、遺跡の発掘調査と報告書の刊行という仕事に携わる者として、どのような姿勢で臨むべきかということをも痛切に思い知らされた。初心に帰ることを教訓として得たことを述べて、終わりとしたい。多くの批判がいただければ幸いである。

### 【 註 】

- 1 それぞれ以下の文献に報告されている。  
河野治雄・河口貞徳・重久十郎 1958 「成川弥生式群集墓」  
『考古学雑誌』43-4 日本考古学会  
文化庁 1973 「成川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』7  
鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財  
発掘調査報告書』24
- 2 筆者が発掘調査に携わったのは、以下の期間である。  
・1980.12.8~1981.3.19, 1981.10.19~12.26
- 3 成川遺跡は、古墳時代の墓だけではなく縄文時代及び弥生時代の生活跡という性格もある。仮に「成川遺跡の全体像」とすると、それらの時代まで扱う必要が生じてくる。本論は墓域に絞り込んだことから、『考古学雑誌』の報告されたタイトルを生かし、かつ墓域の主体が古墳時代であることが明らかとなってきたことから、「成川群集墓」という名称を用いた。
- 4 当時、成川式は弥生時代の土器とされてきたが、今日では主として古墳時代の所産と考えられている。
- 5 第2次調査の報告書（文化庁 1973）中に、「異形鉄器用法復元図」がある。p.101

### 【引用・参考文献】

- 鹿児島県教育委員会 1983 「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財  
発掘調査報告書』24
- 池畑耕一 1984 「熊襲から集人へ(1)」『みなみの手帖』44  
みなみの手帖社  
1985 「熊襲から集人へ(2)」『みなみの手帖』45  
みなみの手帖社
- 合田文夫 1973 「第五章 人骨」『成川遺跡』埋蔵文化財発  
掘調査報告書7 文化庁
- 河野治雄・河口貞徳・重久十郎 1958 「成川弥生式群集墓」  
『考古学雑誌』43-4 日本考古学会
- 国分武一 1973 「第六章第一節 成川遺跡の埋葬に見られる  
習俗について」『成川遺跡』埋蔵文化財発掘  
調査報告書7
- 成尾英仁 1984 「国間信濃山出土物と遺物の関係」『鹿児島考古』  
18 鹿児島県考古学会

文化庁 1973 「成川遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』7  
松下孝幸・石田 肇・佐藤正史 1983 「鹿児島県成川遺跡出  
土の古墳時代人骨」『成川遺跡』鹿児島  
県埋蔵文化財発掘調査報告書 24